

『イルカのねむり方』の学習を生かした『ありの行列』の指導

福山市立手城小学校 川本忠司

(1) 教材について

『イルカのねむり方』、『ありの行列』の教材は、説明文の二教材構成として並べられている。そのため、これらの教材はともに、「はじめ」「中」「おわり」の三部構成で書かれており、文章構成や論理の流れが似通っている。「はじめ」では、これから説明しようとする事柄が「問い」の形で提示され、「中」では、その「問い」を追究した過程が詳細に説明されている。論理の道筋として、①観察や実験を通して分かった事実→②それに基づく考察（仮説）→③仮説を検証するための観察や実験→④その結果明らかになった事実で文章が書かれている。そして、「おわり」では、「問い」に対する「答え」が述べられている。

説明文の第一教材として扱っているイルカは、私にとって普段あまり接触がない生き物である。接触があるとすれば、やはり水族館へ行った時ぐらいである。それだけに、この「イルカのねむり方」というイルカの生態に関する題に惹かれ、興味を持って読み進めることができた。また、子どもたちも私と同様にイルカという生き物の存在は知っていても、普段は接触がないことが予想される。しかし、海で生きる生き物の中では人気が高い生き物だと考えられる。そのため、自分たちと同様に寝るとはいつでもどのように寝るのか、イルカの生態について書かれている本教材に興味をもって読み進めるだろう。

一方、第二教材に出てくるありは私の普段の生活の中で見慣れている生き物である。ありが行列をつくっているところも目にしたことがある。子どもたちにとってもありは身近な生き物であるが、これまでの生活経験の中でありが行列を見たことがある子どもたちは少ないのではないだろうか。ありが行列を見た子どももそうではない子どももありが行列をつくる理由については、新たな発見の喜びを得ることができるだろう。

第三学年になり生き物についてより深く学習するようになる子どもたちにとって、『イルカのねむり方』、『ありの行列』の教材は、生き物の不思議に惹かれ、主体的に学習に取り組むことが考えられる。その学習過程の中で、第一教材での学習を讀みの指標にして第二教材の学習を展開し、この二教材構成のメリットを生かした学習を期待することができる。

(2) 学習目標について

① 価値目標

国語科「読むこと オ」では、「文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気づくこと。」が指導事項になっている。

そこで、第三学年の道徳3□（2）自然愛・動植物愛護、「自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にすると関連づけて、「自分とは異なる考えや感じ方に接する中で、動植物を大切にすると心を更に深めることができる。」を価値目標として位置づける。

現代の子どもたちは、自然界へと目を向ける機会が失いつつある。このような時代の中で、児童にとって興味のあるイルカや身近な生き物であるありといった自然へと焦点を当てることで、今まで気づけなかった自然の面白さ、奥深さに目を覚まされると考える。また、同時に、少しでも自然を感じることで、自己とのかかわりについて気づき、自然愛護、環境保護の方向へと目を向けさせることができる教材だと考える。

② 技能目標

(ア) 関連する学習指導要領の目標

関連する学習指導要領の指導事項の中心は、読むことイ「目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと。」、オ「文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。」である。

(イ) 教材に即して学習指導要領の目標を改変した目標

これらの指導事項を受け、また、教材の特性を考えて本単元では、「文末表現や指示語・接続語、繰り返して出てくる言葉などに着目しながら読み、[はじめ][なか][おわり]の三部構成をとらえるとともに、文章全体におけるそれぞれの部分の役割を考えることができる。」、「一つの段落には一つの事柄が書かれていることへの理解をもとに、段落のなかの中心となる語や文を見つけながら文章を読むことができる。」、「文章を読んで何に引きつけられたかをはっきりさせて、感じたことや考えたことを書くことができる。」といった技能目標を想定することができる。その中でも特に、「文章全体の構成[はじめ][なか][おわり]を把握し、それぞれの段落の内容を読み分けることができる。」を中心に指導する。

(ウ) +αの技能目標

教材に即して学習指導要領の目標を改変した目標に加え、文章全体の内容や構成から論理を考えながら読ませていく。具体的には、実験・観察→分かった事実→考察(次の仮説)→実験・観察(仮説の検証)という科学的な論理から因果関係をとらえさせることも技能目標とする。

③態度目標

3年生になると、生活科から理科に教科が移行し、生き物についてもより深く学習するようになる。そのため、生き物のさまざまな不思議に興味・関心をもつようになる児童も多い。

そこで、「生き物の生態を科学的に書いた文章を読むことに関心をもつことができる。」を態度目標とする。

(3) 言語活動と活動目標

「高学年に観察日記を紹介しよう」という活動目標を設定する。

目的意識・相手意識をもたせるために、学習を通して完成した「イルカの観察日記」「ありの観察日記」をこれまでに様々な観察を行ってきた高学年に評価してもらう場をつくる。そして、そのような場を設定することで今後の学習に向けての意欲を高めていくようにする。

『イルカのねむり方』、『ありの行列』から、文章の内容を理解するために、文章構成や観察・実験報告の仕方(観察方法「調べたこと」→観察結果「分かったこと」→考察「考えたこと」という科学的な論理の道筋)など、筆者の書きぶりについて話し合う活動を通して、「何が」書かれているのかを読み取らせていくようにする。そして、読み取ったことを観察日記という形で表現させていく。

観察日記は、『イルカのねむり方』、『ありの行列』の学習を進めながら、それぞれ作っていく。具体的には、まず、『イルカのねむり方』の学習をしながら、観察方法は「調べたこと」、観察結果は「分かったこと」、考察は「考えたこと」という見出しに沿った「イルカの観察日記」を作成する。次に、「イルカの観察日記」を通して習得した文章構成や論理の仕方を『ありの行列』の「ありの観察日記」を作成していく中で活用する。このように、説明文の第一教材で習得した内容を第二教材で活用するというように説明文二教材構成を活かすようにする。

また、児童の主体的な活動を仕組んでいくために、設定した活動目標から、単元全体のゴールを見通した学習の方向性を明確にする。そして、児童に「今、何のためにこの学習をしている

のか。」を意識させ、学習の自覚化を図る。そのために、児童が作品と出会う前に0次を指導過程に設定し、児童が目的意識をもちながら言語活動に取り組み、この活動目標を学習のゴールとして意識しながら学習を進めていくことができるようにする。

具体的な取り組みとして、『イルカのねむり方』、『ありの行列』の学習に入る前に、動植物を教室で観察したり、飼育したりすることができる教室環境をつくる。さらに、いつでも生き物について疑問に思ったことを調べることができるように生き物に関する絵本や図鑑などの資料を置くようにする。

(4) 方法と評価

活動目標＝単元名（高学年に観察日記を紹介しよう）

『イルカのねむり方』

	言語活動	学習目標	評価方法
導入 (1)	<p>動植物を教室で観察したり、飼育したりすることができる教室環境をつくる。</p> <p>生き物について疑問に思ったことを調べることができるように生き物に関する絵本や図鑑などの資料を置く。</p> <p>自分たちの身の回りにある自然を思い起こしながら、『イルカのねむり方』を読む。</p> <p>生き物について説明した文章を読んで、観察日記を書き、その書き方を高学年に伝える学習の計画を立てる。</p>	<p>人間の生態との比較をしたり、身近な動植物について注意深く観察したり、大切にしようとする。</p> <p>(態度目標形成)</p> <p>生き物の生態を科学的に書いた文章を読むことに興味をもつことができる。</p>	<p>発表 観察日記</p>
展開 (3)	<p>観察日記の書き方(構成)を考える。</p>	<p>三部構成の説明文の文章構成をとらえる。</p> <p>段落に番号を振る。</p> <p>「はじめ・なか・おわり」に文章を分け、「問い(問題提起)」と「答え(結論)」を読み取る。</p>	<p>観察日記</p>

	<p>観察方法「調べたこと」 →観察結果「分かったこと」 →考察「考えたこと」の見出しに沿って観察日記を書く。</p> <p>※観察日記（案） 観察日記という一冊の本のような形に仕上げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 表紙のタイトルを本文の「問い」にする。 「イルカは、いつ、どんなねむり方をするのか」 調査（調査1、調査2、調査3、調査4）ごとに、観察方法「調べたこと」→観察結果「分かったこと」→考察「考えたこと」の見出しに沿って観察日記にまとめる。 観察・研究語彙、理解語彙、思考語彙に着目して読み進める。 最後のページには、結論と編集後記（次時の終結で扱う）を記す。 	<p>「答え」を導くために、どのような観察や調査をしたのか、観察・研究語彙（～をくらべました。～を調べました。）、理解語彙（～がわかりました。）、思考語彙（～と考えました。～にちがいません。）に着目して考える。</p> <p>「調べたこと」「考えたこと」など、それぞれの段落の内容を読み分ける。</p> <p>（技能目標形成） 文章全体の構成[はじめ][なか][おわり]を把握し、それぞれの段落の内容を読み分けることができる。</p>	観察日記
終結 (1)	<p>イルカの生態について簡単な感想（編集後記）を書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> 文章を読んで何に引きつけられたかをはっきりさせ、理解語彙（～がわかりました。）、思考語彙（～と考えました。～にちがいません。）を使い、簡単な感想文を書く。 	<p>自然のすばらしさや不思議さに感動したことを観察日記に感想を書く。</p> <p>（価値目標形成） 自分とは異なる考えや感じ方に接する中で、動植物を大切にすることを更に深めることができる。</p>	観察日記

『ありの行列』

	言語活動	学習目標	評価方法
導入 (1)	<p>動植物を教室で観察したり、飼育したりすることができる教室環境をつくる。</p> <p>生き物について疑問に思ったことを調べることができるように生き物に関する絵本や図鑑などの資料を置く。</p> <p>自分たちの身の回りにある自然を思い起こしながら、『ありの行列』を読む。</p>	<p>人間の生態との比較をしたり、身近な動植物について注意深く観察したり、大切にしたりしようとする。</p> <p>(態度目標形成)</p> <p>生き物の生態を科学的に書いた文章を読むことに興味をもつことができる。</p>	<p>発表 観察日記</p>
展開 (3)	<p>観察日記の書き方(構成)を考える。</p> <p>実験方法「調べたこと」 →実験結果「分かったこと」 →考察「考えたこと」の見出しに沿って観察日記を書く。</p> <p>※観察日記(案)</p> <p>観察日記という一冊の本のような形に仕上げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 表紙のタイトルを本文の「問い」にする。 「ありは、ものがよく見えないのに行列ができるのはなぜか」 調査(調査1, 調査2, 調査3)ごとに、観察方法「調べたこと」→観察結果「分かったこと」→考察「考えたこと」の見出しに沿って観察日記にまとめる。 	<p>三部構成の説明文の文章構成をとらえる。</p> <p>段落に番号を振る。</p> <p>「はじめ・なか・おわり」に文章を分け、「問い(問題提起)」と「答え(結論)」を読み取る。</p> <p>「答え」を導くためにどのような実験や研究をしたのか、観察・研究語彙(～ました。), 理解語彙(～です。～ます。), 思考語彙(～と考えました。)に着目しながら、段落ごとに調べたことや考えたことを読み取る。</p> <p>第三, 四, 五段落から, 二つの実験方法と実験結果, 考察を読み取る。</p> <p>第六, 七段落, 八段落から, 研究方法と研究結果, 考察を読み取る。</p>	<p>観察日記</p> <p>観察日記</p>

	<ul style="list-style-type: none"> 最後のページには、結論と編集後記（次時の終結で扱う）を記す。 観察・研究語彙、理解語彙、思考語彙に着目して読み進める。 	<p>（技能目標形成）</p> <p>文章全体の構成[はじめ][なか][おわり]を把握し、それぞれの段落の内容を読み分けることができる。</p>	
<p>終結 (1)</p>	<p>ありの生態について簡単な感想（編集後記）を書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> 文章を読んで何に引きつけられたかをはっきりさせ、理解語彙（～がわかりました。）、思考語彙（～と考えました。～にちがひありません。）を使い、簡単な感想文を書く。 <p>六年生に観察日記を紹介する。</p>	<p>自然のすばらしさや不思議さに感動したことを観察日記に感想を書く。</p> <p>（価値目標形成）</p> <p>自分とは異なる考えや感じ方に接する中で、動植物を大切にすることを更に深めることができる。</p>	<p>観察日記</p> <p>行動観察</p>

（５）最後に

千葉大学の寺井正憲氏は、習得と活用の観点から、国語科授業づくりについて次のように言っている。

「指導事項の知識・技能を習得してから、言語活動例の言語活動で活用するのではなく、言語活動の活用を行いながら知識・技能の習得を織り込むという発想の授業づくりが重要である。結局のところ、身につけさせる知識・技能をいかに効果的に言語活動の中に織り込んでいけるかが要諦になる。」

この度の提案では、『イルカのねむり方』、『ありの行列』の学習を展開する中で、観察日記を作りながら、文章全体の構成の把握、段落についての理解、それぞれの段落の内容を読み分ける等を織り込むという発想の授業づくりを目指した。

言語活動を重視した本単元のような説明文二教材構成の単元を構想する中で、これからの授業づくりとして、言語活動の活用を行いながら知識・技能の習得を織り込むという発想がより一層大事になってくるだろう。